



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching & Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2022

vol. 40

あたらしい学びのかたちを求めて

教育開発支援センター長 中澤 務



2022年10月に教育開発支援センター長に就任した中澤です。これまで、主としてライティングラボの責任者のひとりとして、10年あまりにわたって関西大学の学修支援に関わってきました。この間、大学での学びをめぐる環境はさまざまに変化し、ライティングラボでも、さまざまな新しい試みを展開しています。

これまでも、おりにふれて、大学での学びをめぐる問題を考えてきましたが、教育開発支援センター長として関西大学の教育を考えていく立場に立ってみると、これまで気づけなかったさまざまな問題に気づかれます。とりわけ、いま考えているのは、アフターコロナの時代におけるあたらしい学びのかたちについてです。

2020年ころからはじまったコロナ禍によって、社会は大きな混乱をきたすことになりました。大学も例外ではなく、当初は対

面授業ができず、オンライン授業のみという異常事態にもなりました。最近では通常の授業形態に戻つつあり、関西大学では、来年度から、原則、対面授業に復帰する見込みです。コロナ禍の終息にはまだしばらく時間がかかるかもしれませんが、それでも、大学教育はコロナ以前の状態に戻るといふ希望が見えはじめています。

しかし、他方で、社会がそのままコロナ以前の状態に戻ることはないと考えられることもできます。たとえば、コロナ禍をきっかけとして、リモートワークが急速に普及し、そのメリットが認識されるようになりました。この働きかたの変化は、アフターコロナの時代になっても続き、あたらしい生活形態として定着していくことになるでしょう。

大学の教育では、オンライン授業があたりまえの変化を作り出していくと考えられ

ます。オンライン授業は、当初は、対面授業の代替物にすぎませんでした。しかし、オンライン授業が導入されて3年近くが経過したいま、さまざまな変化のきざしを感じることができます。教員側は、オンライン授業のメリットを生かした教材づくりを工夫し、その技術を向上させてきました。学生側でも、オンライン教材で効果的に学ぶノウハウを自然と身につけています。

あたらしい学びのかたちを模索していくために、学生の声に耳を傾けることが、ますます重要になってくるでしょう。これまでの教育は、教える側の論理で作られてきましたが、これからは、学びに対する意識を把握し、学生の視点に立った工夫をしていくことが求められます。教える側と学ぶ側の協働のなかから、あたらしい学びのかたちは生まれてくるのだと思います。

活動報告

第27回関西大学FDフォーラム 「学生の多様性に寄り添う大学授業における合理的配慮を考える」を開催いたしました

日程：2022年7月9日(土)

2022年7月9日に第27回関西大学FDフォーラム「学生の多様性に寄り添う大学授業における合理的配慮を考える」を開催いたしました。ここ数年、関西大学のFDフォーラムでは、アクティブラーニング、オンライン授業における教育方法や、IRや教育の質保証を中心に扱ったFDフォーラムを開催してまいりました。今回は、「多様な学生に寄り添うこと」をテーマにし、授業の中でどのように学生をサポートしていくことが望ましいのか、について学べる場を企画し、学生相談・支援センターにも協力をいただき実施しました。

大学ではオンライン授業での学びやアクティブラーニングが推進されています。その一方で、アクティブラーニングでグループワークに参加することや、オンラインでのディスカッションが苦手な学生も存在します。こうした学生の多様性に寄り添う大学授業にはどのような形があるのでしょうか。我々教員はどのような振る舞いをすることがのぞましいのでしょうか。また職員やティーチングアシスタントやラーニングアシスタントといった学生スタッフの立場からどのような支援ができるとよいのでしょうか。

今回のFDフォーラムでは、こうしたことを皆さんとともに考え、学生の多様性に寄り添う大学の授業における合理的配慮を検討する場といたしました。まず丸田伯子先生(一橋大学

保健センター教授)より、精神科医という立場から「メンタルヘルス領域の支援ニーズを有する学生への多様なアプローチ」についてお話しいただきました。丸田先生によると、令和3年度の全障がい学生(35,341名)のうち、約半数が精神障がい(9,682名、27.4%)と発達障がい(7,654名、21.7%)の学生となっています。発達障がいを抱える学生は「向かない授業をとってしまったとき」「卒論を書くとき」など、ある状況に置かれた際に課題が起きることが多いといいます。そういう時にチームプレイができ、議論を重ね、発達障がいを持つ学生に対する建設的対話、精神障がいと発達障がいを併せ持つ学生への合理的配慮を調整することが重要であるとの報告がされました。オンライン授業では、発言氏名の免除や1、2週間配信期間を設ける(自分のリズムで学べるように)等の具体的な対応例についても紹介されました。

発達障がいを研究されている片岡美華先生(鹿児島大学 教育学系准教授)からは「大学授業における多様な学生に向けた教員の工夫と大学の配慮」についてお話しいただきました。特別支援教育分野におけるキーワードを中心に、具体的な授業における課題(例：ノートを時間内に書くことができない、課題の遅れ、ノートをあちこちに書いてしまう等)やその解決

策について検討する機会となりました。

近森聡氏(関西大学学生相談・支援センターコーディネーター)からは、「本学のアクティブラーニングにおける学生支援について」お話しいただきました。典型的な架空の事例として、自閉スペクトラム症の診断を受けている学生がペアワークやグループワークが困難であるという状況をあげられ、その際どういった対応をすることが望ましいのかについて報告がされました。

その後、山田剛史氏によるパネルディスカッションでは教職員の連携や家族支援について有益な意見交換がなされました。学内からも教職員をはじめ、たくさんの学生にも参加いただきました。ありがとうございました。当日の資料は教育開発支援センターのWEBサイトにて公開しています。

(教育推進部教授 岩崎千晶)



パネルディスカッションの様子

学生ラーニングCaféを実施しました

2022年度はスキルアップ企画とLA交流企画の2本立てで開催しています。

春学期では計6回開催し、(1)スキルアップ企画では「アドリブ力を身につけよう-アイデアマンになれるかも!」などの具体的なスキルの育成ワークショップを行い、(2)LA交流企画では本学の現役LAおよびLA希望の学生、他大学のLAさんとの交流を行っています。参

加者からは「自由な発想の大事さがわかった」「他大学だからこそ話し合える話題が多くあった」などの好意的な感想が寄せられました。

初対面の参加者が企画終了後もおしゃべりを続けているのはラーニングCaféならではの光景でした。

(教育開発支援センター アドバイザリースタッフ 上島洋一郎)



学生ラーニングCaféの様子

学生ラーニングCaféの感想

将来教員になったときに、生徒が勉強以外のことも学べる環境を作りたいと思っているので、Caféに携われることは将来の糧になっています。

また、来てくれる学生が増えるよう呼び込み方を工夫し、Caféに

来てくれた学生へのその後のフォローを考えて、1回の関係で終わらせないようにして、Caféを活性化させたいです。

(政策創造学部4年生 伊藤由佳)

関西大学高等部1年生を対象に「論文執筆ガイダンス」を実施しました。

日程：2022年7月12日(火)

関西大学高等部では生徒たちが興味関心を持っていることについて研究する「課題研究」という学びがあり、その一環として「論文執筆ガイダンス」をアクティブラーニング形式で行いました。「アイディアの拡散・点検・アイディアを絞る」という論文テーマ決定までのプロセスを学んだ後、テーマ試作のワークを実施しま

した。つづいて論文検索サイトや論文の構成を紹介してから、試作したテーマについての論文を検索しました。最後、生徒たちがParagraph readingのコツを使いながら検索できた論文を速読するという体験をしました。

(教育推進部特別任用助教 張 暁紅)



ガイダンスの様子

LA研修を開催いたしました

日程：2022年9月16日(金)

9月16日、LA研修を開催しました。3年ぶりに対面形式だったので、新鮮味と刺激がありました。千里山キャンパスで勤務するLAを中心に、総合情報学部のLAや大学院生のLAを交えて、33名が参加しました。自ら仲間を見つけるグルーピングをアイスブレイクとしてスタートし、誰もが互いに気軽に話しかけられる雰囲気を作りました。勤務を始めてから日の浅いLAと何期もの経験のあるLAが一堂に会し

て、日頃、感じている不安や疑問を忌憚なく話し合いました。新人はこれから先、自らがLAとして歩んでいくためのチャートを見出し、経験者は後進に伝えるべき内容の整理をおこなうことができました。今後は、千里山から遠く離れたキャンパスのLAも気軽に参加できる工夫を考えていきたいと思います。

(教育推進部教授 三浦真琴)



LA研修の様子

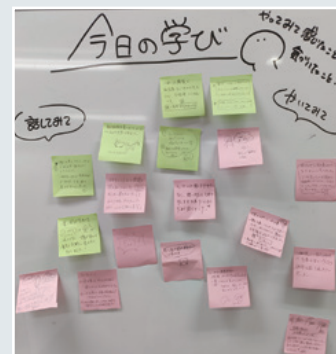
ライティングラボ チューター研修を実施しました

ライティングラボでは、個別相談を担当する大学院生などのチューターの能力向上を目的として、定期的にチューターの研修を実施しています。この秋学期の直前には、秋学期の個別相談に活かすことを目的として、「個別相談におけるグラフィック・レコーディングの活用」をテーマとした研修を実施しました。今回は外部講師として、肥後祐亮氏(NPO法人グローバル人材開発センター)をお招きしました。

当日は、図形やイラストを用いて相談者であ

る学生の思考を整理し、学生の文章作成を支援する方法について、ロールプレイを交えた研修となりました。また今回は、LA(ラーニング・アシスタント)の学生も参加可能とし、いつもの研修とは少し違った雰囲気となりました。参加者からは、「チューターとして聞く力だけでなく、聞く内容を可視化する力も大事だとあらためて感じました」など、自身の個別相談に活かそうとの声が聞かれました。

(ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 大西 洋)



研修の振り返りの様子

スポーツ・フロンティア(SF)入試入学者を対象に「文書作成能力向上講習会(秋学期)」を実施しました

日程：2022年10月24日(月)
11月7日(月)
11月21日(月)

春学期に続き、スポーツ・フロンティア(SF)入試で入学した学生を対象として、3回の「文書作成能力向上講習会」を実施しました。春学期は同入試で入学した全員を対象としましたが、秋学期は春学期の状況を踏まえ、対象とする学生の人数を絞って開催しました。

各回の講習会では、春学期に扱った文書作成の基礎事項を踏まえ、学生が作成したレポートを自己評価したり、相互評価したりといった活動を重視しました。また、春学期の

講習会同様、対象の学生にライティングラボの個別相談を利用してもらいました。どう取り組めばよいか困っているレポート課題について、学生それぞれが個別相談に持参し、チューターと一緒に改善案を検討しました。講習会は1年生を対象として例年実施していますが、今後も個別相談を通して、進級後も学生の学習活動を支援します。

(ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 大西 洋)



講習会の様子

教学IRプロジェクト報告

下記いずれの結果も、関西大学教学IRプロジェクトのWebサイトから見ることができます。



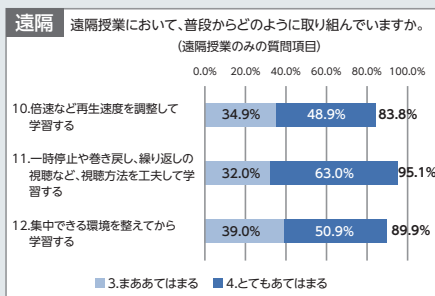
「2022年度春学期の授業・学生生活に関する学生アンケート」を実施しました

教学IRでは、コロナ禍での学生の学びと生活実態を把握し、教学改善に繋げるための学生調査を継続的に実施しています。今年度は2022年9月21日から10月16日の期間に実施しました。在学生27,852名を対象とし、回答者数は3,303名(回答率: 11.9%)でした。履修割合(全体)は対面66.7%、遠隔33.3%でした。遠隔授業(オンデマンド配信型)に関する満足度は高く(対面62.6%、遠隔79.4%)、2020年度の調査開始時から回を追うごとに高くなっています。学力の3要素に関する身につき度について、知識・技能で

は、知識は遠隔、技能は対面が高く、思考力・判断力・表現力では、差は見られず、主体性・多様性・協働性では、全て対面が高いという結果でした。学生が遠隔授業に慣れてきており、調整しながら学んでいることも窺われます(図)。困り感について、遠隔授業の困り感は軒並み減少傾向にある一方、対面授業の方では困り感が増加しているなど、対面授業のアップデートが大きな課題だと言えます。学生生活の満足度では、2020年度入学生(現3年生)の値が全ての項目において低く、将来不安の高さ(約7割)とも併せて一定

のケア・サポートが必要であると思われます。

(教育推進部教授 山田剛史)



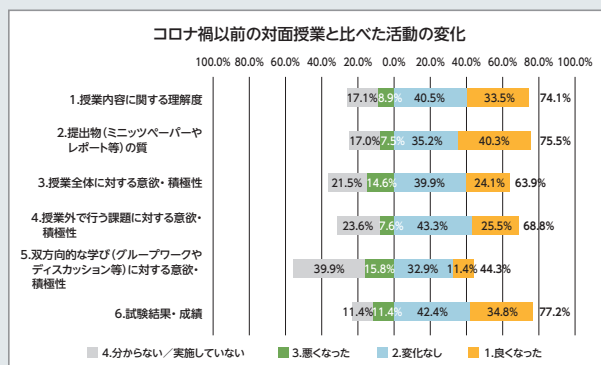
「2022年度春学期の遠隔授業(オンデマンド配信型)に関する教員アンケート」を実施しました

教学IRでは、2022年度春学期に遠隔授業(オンデマンド配信型)を実施した334名の教員(専任205名、非常勤129名)を対象にアンケート調査を実施しました。2022年9月21日から10月16日の期間に実施し、回答者数は159名(回答率: 全体47.6% / 専任71.7%、非常勤8.53%)でした。コロナ禍で実施している遠隔授業とコロナ禍以前に実施していた対面授業(同一科目)とを比較して、理解度や提出物の質、試験結果・成績など多くの項目で対面時より良くなったという結果が示されています(図)。定期的な課題の提示や質問へのフィードバック、理解度の確認などは積極的に行われている一方、学生同士のディスカッショ

ンやプレゼンテーション、探究学習など、双方向的な学びや学生によるアウトプットは十分に行われておらず、この点は課題であると言えます。平均的な1回の動画時間の平均は約70分であり、教員によって幅が大きく、学習時間の確保に係る質保証についても課題と言えます。全体的に遠隔授業を実施している教員の評価は高く、対面授業と遠隔授業が学生の学びに効果的な影響をもたらすようなカリキュラムや授業のデザイン、

持続的に運用する教学マネジメントの確立が求められます。

(教育推進部教授 山田剛史)



教育開発支援センターからのお知らせ

教育開発支援センターの Web サイトをリニューアルしました

11月より、教育開発支援センターのWebサイトをリニューアルいたしました。従来のHPに比べ、学生や教員、職員の方々がよりわかりやすく、かつ見やすくなっております。コロナ禍で増大したマニュアルも分類ごとに分け、それぞれの目的から選択することができます。

また、教員の方々にもインタビューを実施し、

その内容を新たに掲載することを始めました(「授業のサポート」>「教員インタビュー」)。授業形態や授業手法などごとに、good practiceを集約しておりますので、教員の皆様はFD活動としてご利用いただけますと幸いです。教員の皆様の中で、有効な事例等がございましたら、教育開発支援センターまでお知らせ

いただけますと幸いです。

(教育開発支援室 西村瑛皓)

教育開発支援センターの
Webサイト
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>



物事を的確・適切に見ることができる力が大切であると、最近痛感させられている。データや情報があっても、それを

「どのように見るか」によって、導き出される答えは全く異なる。少子高齢化、不安定な世界情勢、新型コロナウイルスなど、誰も先を予測できない社会のなかで、いま何が起っており、何が必要なのか。これを考

えるために、データや情報を的確・適切に見られるセンスを培いたい。そのためには、経験や幅広い知識が必要であらうし、恐れることなくチャレンジする精神を持って考動していきたい。(あし)



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching & Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 FAX: 06-6368-1514

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日/2022年12月14日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター